インドの酒類メーカー、英貿易協定に基づくスコッチ原酒の関税適用明確化を求める

税関分類をめぐる問題で、ブレンドや瓶詰め向け輸入品にも従来の150％関税が課される可能性が浮上。

2026年11月10日（火）



インドの酒類メーカーは、国内でのブレンドや瓶詰め向けに輸入するスコッチウイスキーの原酒に、インド・英国貿易協定で約束された低い関税率が適用されるかどうかについて、正式な明確化を求めている。税関分類をめぐる問題を受け、一部の輸入品には従来の150％関税が引き続き課される可能性が浮上した。

この問題は、完成品の輸入だけでなく、原料としてスコッチに依存するインドのウイスキー業界の一部にとって重要性を増している。スコッチ原酒は、一部企業が国内で瓶詰めするほか、プレミアムからマスプレミアムまで幅広い価格帯の商品でインド産スピリッツとブレンドするため、関税の判断は輸入業者、瓶詰め業者、国内メーカーのコストや利益率に影響する可能性がある。

不透明感が生じたのは、インド・英国包括的経済貿易協定が7月15日に発効した後だ。同協定に基づき、条件を満たすスコッチウイスキーの輸入関税は150％から75％に引き下げられ、10年間かけて段階的に40％まで低下する。Outlook Businessによると、関税引き下げの約束は、製品要件と原産地規則を条件に、瓶詰め品と原酒の輸出の双方を対象とする。

争点は、一部のスコッチ原酒の貨物を税関上どのように分類するかだ。インドの税務当局は、貨物によっては第2208項のウイスキーとして扱うべきか、あるいは第2106項の飲料製造用調製品として扱うべきかを問題視している。この違いは重要だ。第2106項に分類されれば、貿易協定による引き下げ後の税率ではなく、従来の150％関税が適用される可能性がある。

酒類業界は、スコッチ原酒は小売用ボトルで輸入されても、インドで後に瓶詰め・ブレンドするために大型容器で輸入されても、ウイスキーであることに変わりはないと主張している。業界幹部によると、この見解の相違は、ニッチな輸入品目ではなく、確立されたサプライチェーンに影響する。

Outlook Businessによると、多くのインドのウイスキーメーカーは、特定の風味を実現するため、モルトウイスキーとグレーンウイスキーをベースとするスコッチを輸入し、国内産スピリッツとブレンドしている。インド産ウイスキーのすべてが輸入スコッチを使うわけではないが、一部メーカーにとっては生産の重要な要素だ。Reutersが引用した業界推計によると、英国からのスコッチウイスキー輸入量の約80％は、原酒の状態で輸入されている。

分類をめぐる問題には、規制当局の監視も及んでいる。Reutersによると、Diageo、Pernod Ricard、Radico Khaitan、Allied Blendersなど大手酒類企業が調査の対象となり、各社に関連する施設が捜索され、幹部が事情聴取を受けた。ただし、この調査によって各社の不正行為が立証されたわけではない。

政府は業界の懸念払拭に努めているが、各社は正式な決着を待っている。Outlook Businessによると、ラジェシュ・アグラワル商務次官は11月2日、業界関係者に対し、スコッチ原酒への関税譲許は維持されると述べ、HSN分類の曖昧さを解消するための措置を講じていると説明した。商務省はまた、この問題を財務省と協議する意向を示した。

この説明により当面の懸念は一部和らいだものの、税関当局が最終的に国境で原酒の貨物をどう扱うかは、まだ決着していない。メーカーにとって、これは単なる技術上の問題ではない。輸入関税は、輸入原価の算定や仕入れ計画、価格決定に直接反映される。

企業の見通しには、すでに影響が表れている。Outlook Businessは Mintを引用し、Allied Blenders and Distillersが、関税引き下げにより2027年度に70ベーシスポイントの恩恵を見込んでいると伝えた。United Spiritsも一定の恩恵を得ているとしたが、具体的な数字は示さなかった。Tilaknagar Industriesは、旧在庫をまだ保有していたため、9月四半期には恩恵を受けていないと述べた。

税関当局が条件を満たす瓶詰めスコッチには引き下げ後の関税を適用しながら、原酒には適用しない場合、ブレンドや国内瓶詰め向けにスピリッツを輸入するメーカーの原料コストは上昇する可能性がある。影響の度合いは、各社の輸入スコッチ使用量や対象となる商品カテゴリーによって異なる。また、プレミアム商品の完成品を輸入する場合と、インド国内で付加価値を加えて製造するために原酒を輸入する場合とのバランスが変わる可能性もある。

関税変更の影響は消費者にも届き始めているが、その広がりは一様ではなく、原酒の輸入問題が決着したことを示すものでもない。Outlook Businessが引用したPTIの報道によると、デリーの物品税局は英国産酒類の改定価格の適用を開始し、一部のプレミアムスコッチは値下がりする見通しだ。同じ報道によると、ウッタル・プラデーシュ州では英国原産の複数の酒類ブランドがすでに約5%から15%値下がりしている。

Outlook Businessが引用した業界関係者は、未加工の穀物やモルト、ブレンド・瓶詰め用のスコッチ原酒、瓶詰め済みのスコッチはそれぞれ商業上の用途が異なるため、明確な定義が必要だと述べた。予測可能な関税の適用は、メーカーの生産計画を助け、投資を後押しするとともに、インドのウイスキーブランドが新商品を開発するうえでの安心感につながるという。

飲料業界全体にとって、この問題は一つの税関分類コードにとどまらない。インド・英国協定の重要な関税譲許が、スコッチの蒸留業者、インドの輸入業者、国内の瓶詰め業者、インドのウイスキーメーカーを結ぶサプライチェーン全体に円滑に適用されるかどうかを左右する。正式な分類決定が下されるまでは、スコッチ原酒に依存する企業は、価格設定、収益性、商品戦略を左右し得るコストの不透明さにさらされ続ける。